

『阿Q正伝』の教材化と中国における解釈 ——『中学課本魯迅小説匯釈』の紹介——

白 井 宏

I. 『阿Q正伝』の教材化

魯迅は、日本の中学校・高等学校の国語の教科書に登場する外国人作家の常連の一人であり、中国人としては、ほとんど唯一の作家である。

しかし採用される作品は限られており、中学校においては『故郷』、高等学校においては『藤野先生』というのが、ほぼ定まった形である。(他には、『孔乙己』と、講演記録『ノラは家出してからどうなったか』が一部教科書に見られる程度である。)

確かに、『故郷』は、ふるさと(あるいは中国)に寄せる、愛憎せめぎ合う魯迅の複雑な思いが深く描かれた好短編であり、一方『藤野先生』は、魯迅の魂のありかや精神の成長の様子をうかがわせるのみならず、日本と中国の文化交流という観点からも逸することのできない作品である。

従って、このような作品選択に対して、敢えて異を称えるわけではないが、それでもやはり、『狂人日記』『阿Q正伝』『兩地書』などの作品が教材化されないことに対しては、ある寂しさと不満を禁じ得ないものがある。中でも『阿Q正伝』は、魯迅の代表作、つまりは近代中国を代表する作品であるというだけでなく、世界の近代文学の中においても、特異な地位と確かな評価を得ている作品である。

それが今まで教材化されなかった理由は、ひとつは教科書教材としては長すぎるということと、今ひとつはその難解さによるものであろう。確かにこの作品をまるごと教科書に採るということは不可能だろうが、長編の一部分を教材化するという事は、珍しいことではない。(現に中国においても、この作品はそのように扱われているという。)

また、語彙・語法・作品の精神(主題)・時代背景等からみて、この作品は決して平易とはいえないが、(これまた中国において、もはや——現在の若い人達にとって——魯迅は——とりわけ『阿Q正伝』は——かなり読み難い、難解なものになってきているという。それは、必ずしも語彙や語法だけの問題だけでなく、当時の習慣や社会状況が解り難くなっているからということである。われわれの国語教育の中で、鷗外や一葉や漱石などが、次第に「現代文」としては扱い難く

なっているのと、類似の現象かもしれない。特に中国の場合、その間に大革命を経ており、社会状況その他が一変してしまったという事情がある。)しかし、阿Qという特異な人間像や、それを描く魯迅独特の“幽默”の文体等は、漫画世代ともいべき現代の日本の高校生に、かなりの程度受け入れられるのではないだろうか、そういう予想が筆者にはある。

そして、魯迅の代表作、世界の名作であるという文学史的評価にもまして、筆者が『阿Q正伝』教材化の理由として考えるのは、かつて竹内好がその生存の意味のすべてを賭けて魯迅と対決したのとやや似たような意味で、現代の青年が『阿Q』を読むことの意味の、決して小さくないことを考えるからである。

脱亜入欧の明治以来、今やその西欧に「追いつき追い越」してしまったかの日本、その先に横たわっているかもしれぬ暗闇には眼をつぶり、今日の飽食を享樂しているようにも見える日本人。そして、ゴールの定かならぬ競走に駆りたてられる中で、自己をも仲間をも見失いがちな若者。時代と青春という函数からみると、現代の日本は、辛亥の夢破れた後の軍閥混戦の阿Qの時代や、日本軍国主義の密雲の下で魯迅に自己の存在証明を求めた竹内好の時代と、どこか類似する点があるとも言えるのではないだろうか。

そういうことさらなアナロジーを求めなくとも、大多数の青春にとって、時代はつねに閉塞していると観じられるものと言えるのかもしれないし、魯迅文学が、そういう意味での普遍性を持ち得ている、と言ったほうがよいのかもしれない。

ともあれ、『阿Q正伝』が、恐らく初めて教科書教材になった。61年度より使用予定の、三省堂版『新現代文』において。そこでは、冒頭の第一章(序)と末尾の第八章(禁じられた革命)、第九章(大団円)とが採られ、第一章と第八章との間には、その間の梗概が付けられている。

いずれ多くの教材研究や実践報告が提出されるだろうが、本稿では、そのためのひとつの参考資料として一冊の本を紹介し、あわせてその一部を翻訳することとする。

Ⅱ. 『中学課文魯迅小説匯釈』の紹介

この本は、北京師範大学中文系の『中学課本魯迅小説匯釈』編輯組によって編集され、1983年7月、天津人民出版社から刊行されたものである。編集出版の意図は、次に示す「編輯説明」と題された本書の前書きに簡潔かつ明瞭に表されている。

編輯説明

大学・中等学校での魯迅作品の教育と研究に若干の資料を提供するために、我々はこの『中学課本魯迅小説匯釈』を編集してみた。

本書の扱う範囲は、現行中等学校の国語教科書に採られている魯迅の小説作品に限った。しかし普通の常識から言っても、これらの作品は、魯迅の小説を代表する作品でもある。そのうち『阿Q正伝』は、中等学校国語教科書の中ではその一部分が採られているのだが、作品全体を把握するために、我々はやはり小説全体の角度からの資料を選択編集した。

本書中選録したのは、魯迅がその小説を発表して以来、1981年末までの関係資料である。読者の必要とする対象が一樣ではないことを考慮して、我々は異った時期の代表的な論述、精確な文章を選録し、同時に、それぞれの時期の中での異なった意見のうちの代表的な文章をも選録した。

採用した文章は、“作者自述”“思想内容”“人物形象”“芸術分析”等の内容によって分類し、そのそれぞれを、具体的情況に基いてさらに詳しく細目分類した。(中略)文章の配列は、だいたいはその発表時期の順序によった。

用いた資料は、時間の上からいえば前後約60年の開きがある。その間の種々の原因によって、同一論者の意見でも、時には大きな差異が見られる場合もある。早い時期のある文章は、あるいは既に論者のその後の考えを代表できないものもある。しかし、研究者の便宜のために、我々はそのままの形で採録した。

文章は全て抄録である。我々はできるだけ正確に論者の意図を反映するように努めたが、ただ、本書全体の紙幅を考慮して、いくつかの文章については、結論部分だけしか採れなかったものもある。読者がもし論文全体を見たいと望むならば、明示しておいた出典によって原文を参照されたい。

(後略)

ここに見るように、本書は、中国の中学校(日本の中学校にあたる初級中学と、高等学校にあたる高級中学をあわせたものをいう。従って訳文では、中等学校

とした。)の語文(日本の、国語科にあたる)の教科書に採られている魯迅の小説作品についての諸解釈を、集成分類したものである。『狂人日記』『孔乙己』『薬』『小さな出来事』『故郷』『阿Q正伝』『村芝居』『祝福』の8作品が対象となっている。

『阿Q正伝』については、「一、作者自述」として、魯迅自身がこの作品について言及した文章が16篇摘録され、それに続いて、「二、思想内容」「三、人物形象」「四、芸術分析」に分類されて、延べ132篇の(1篇の論文が、内容や論点によって複数の項目の下に分類されている場合がある。)論文が採録されている。

以下、紙幅の都合上、「二、思想内容」に収められた11篇の文章を試訳して示す。公式の見解にやや辟易させられる点もないわけではないが、教材研究のための一助となれば幸いである。論文中、魯迅作品本文からの引用部分の訳文は、原則として、『魯迅文集(竹内好訳 筑摩書房刊)]』によった。文頭の1~11の通し番号は、便宜上筆者が付したものである。

Ⅲ. 『阿Q正伝』二、思想内容の翻訳

(1) 主題

1. 『阿Q正伝』の高度の思想性は、封建思想と洋奴思想に対する、典型的かつ尖鋭な批判の上に表れている。

『阿Q正伝』の中心思想は、最も簡単な言葉で言うとなれば、それはつまり、阿Q主義批判ということである。

—張畢来『新文学史綱、「阿Q正伝」の思想性問題』 作家出版社 1955年版。

2. 中国農村の階級対立と中国人民の奴隷生活を真実に映し出し、人民をして、封建統治者の残忍さと醜悪さ、及び真の卑屈と懦弱さを深刻に認識せしめ、外国の侵略者に敗れ、民族の自尊心を失ってしまった封建統治者の奴隷の面を徹底的に清算し、それに対して強力な打撃を与えた。同時に、封建統治者が奴隷のようにしてしまった農民精神、このような悲しむべき後進性をつくり出し、精神の麻痺状態に至らしめた彼らの罪状に対して、恨みの告発をしたのである。

—李桑牧『魯迅小説論集、「阿Q正伝」の偉大な意義』 長江文芸出版社 1956年版。

3. 小説は、典型人物阿Qの描写を通じて、半植民地・半封建の中国農村における階級対立と、旧中国労働人民の奴隷生活、彼らの反抗要求、及び彼ら自身の重大な弱点を示している。小説は、辛亥革命のような革命では、まだ阿Q達はその奴隷運命から脱却

することができず、中国労働人民がもしほんとうに、彼等の奴隷運命から脱却したいと望むならば、必ず、新たなる戦い、より徹底した、より妥協のない、より実力を重視した戦いを、押し進める必要があることを、強烈に表している。

——徐中玉『魯迅の小説、雑文及びその他について、
「阿Q正伝」の言葉使いの芸術性』
新文芸出版社 1957年版。

4. 『阿Q正伝』の中心思想は何か？この問題について魯迅先生は自ら、非常にわかりやすく述べている。彼が言うには、彼が『阿Q正伝』を書いたのは、「国民の弱点を暴露したいためである。」（『偽自由書・再談保留』）この「国民の弱点を暴露すること」、これこそが『阿Q正伝』の主題の思想でもある。魯迅先生は、国民のどのような弱点を暴露したのか？主要なことは、2つの面の批判を行っていることである。1つは、人民大衆が自分達自身持っている弱点、即ち、後進性と未覚醒の思想、とりわけ、自己を欺き他をも欺く「精神勝利法」に対して、限りない哀しみを表し、深甚なる善意の批判を提示している。彼等が自身の負荷を捨てて、自己を認識し始めることを望んでいる。今1つの面は、ブルジョア階級の、軟弱性と不徹底性に対して、説得力のある批判をしていることである。『阿Q正伝』は、ブルジョア階級が彼等の軟弱性によって、すでに中国革命を勝利へ向けて指導することができないという事実を、生き生きと、かつ説得的に明示している。

——葉徳政『四人組が「阿Q正伝」を歪曲・利用して進めた反党的罪状を批判する』
『湘江文芸』 1978年8月号。

5. 後進・未覚醒の一農民阿Qを描き、彼と趙且那、にせ毛唐等の人の矛盾斗争を通して、半封建半殖民地期の中国地主階級の、農民に対する残酷無情の政治圧迫、経済搾取と精神の奴隷化の様子を生き生きとあばき出し、辛亥革命前後の中国社会の階級対立と階級斗争とを深刻に映し出し、その時代の社会の様子を表現した。それは、ブルジョア階級の妥協性と不徹底性とを強力に批判したものであり、辛亥革命失敗の歴史教訓を、生き生きとかつわかりやすく総括したものであり、同時に、中国の民主革命にとって、農村における大きな変化が不可欠な重要事であることを、鋭く指摘したものであった。

——秦亢宗『魯迅作品教学問答・「禁じられた革命』』
四川人民出版社 1979年版。

6. 小説は、阿Qの運命の悲劇性の描写を通して、地

主階級の農民に対する残酷な経済搾取、政治圧迫、及び思想統治（まさにこのような思想統治が、阿Q持ち前の“精神勝利法”等の弱点を作りあげたのである）を、極めて深刻にあばき出し、農民の革命要求、及びこのような革命要求が、封建統治者及びその共犯者達による、どのような凶悪な血腥い弾圧に出会うかを描き出し、その基礎の上に、ブルジョア階級の軟弱性と妥協性とを鋭く批判し、辛亥革命失敗の経験教訓を総括している。

——桑逢康『「阿Q正伝」はすばらしい小説である』
（『魯迅研究集刊』（1））
上海文芸出版社 1979年版。

7. 『阿Q正伝』の主題の問題は、現実には既に存在していた。魯迅はそれを形象化して小説に書いたのである。その主題はつまり、国民の精神劣等性、精神勝利法への批判である。

——李何林『国民性の問題から「阿Q正伝」を談ずる』（『魯迅学刊』1981年第2号）

(2) 辛亥革命を映す鏡

8. 『阿Q正伝』は辛亥革命の真実を描いた図画であると言えば、あるいは同意しない人がいるかもしれない。人々はその中に、ただ混乱と強奪、投機と法螺、そして新旧各派の“御一新”の醜劇を見ることができるだけである。阿Qの周りの人物は、どの階級の人であってもすべて好くない人であり、我々はむしろ、にせ毛唐、趙且那、趙秀才そして2人の太鼓もち趙司農・趙白眼達を好い人だとは言いがたい。そして、王胡や小D、呉媽のような下層者についても、バカではないと言うことは難しい。それでは、あの辛亥革命の好い人はどこへ行ってしまったのか？ある革命が、もしそれが革命と言うに値するものならば、そこには当然いくつかの悲壮な光景と、何人かの積極的な人物が存在するはずだ。ところが、『阿Q正伝』の中に我々が見ることができるのは、病態人生と灰色の情景とだけである。まさかこれが真実ではあるまい！いや、これが真実なのだ。辛亥革命はひとつの、徹底した非のうちどころのない革命ではなかった。好いところよりも悪いところが多く、悪党よりも好い人物の方が少ない。と想像することができる。そして、魯迅がその時代を追憶し、またひとりの寂寞の諷刺家の観点に立つと、実際の人物よりも低劣なものを自然に採用してしまふ、嘲笑と鞭撻とを添えて。そういうわけで、我々は次のように述べるべきである。『阿Q正伝』は辛亥革命を描いており、これは20年前の魯迅が、寂寞の心境の中であって、あの時代の悪い点の真実

を描き出したものである。彼自身の言葉を用いて述べれば、つまり、“眼の前を映り過ぎた中国の歴史”なのである。

——立波『阿Qを談ず』、『阿Qを論ず』
耕耘出版社 1949年版。

9. 魯迅は、『阿Q正伝』というこの作品の中で、ブルジョア革命とブルジョア階級の指導する民主革命の特性に対して、深刻無比かつ典型的なる表現を行っている。魯迅の、ブルジョア階級とブルジョア階級の指導する革命に対する見方は、抑圧されている農民の観点、及び革命民主主義の観点から出ているものである。このことは、ふつうのブルジョア階級及びプチブルジョア階級の革命分子に比べて、辛亥革命の弱点をより深刻に摘発することを可能ならしめている。「国民革命には、農村における大きな変化が必要である。辛亥革命にはそのような変化が無かった。それで失敗した。」（『湖南農民運動考察報告』）農民の利益を徹底して擁護するという、プロレタリア階級の立場に立つ毛沢東同志は、このような結論に達したのである。そして、革命民主主義者である魯迅が得たところの実際の結論は、この毛沢東同志の結論と、完全に一致している。

魯迅は、『阿Q正伝』において、終始一貫、被抑圧農民の観点から、革命民主主義の観点から、辛亥革命を観察し表現している。魯迅は、辛亥革命がかつて農村に、なみなみならぬ震動をひき起こしたことを、明瞭に表現した。阿Qのようにもともと非常に遅れている農民をも含めて、すべてを騒動に巻きこみ、封建階級が非常な恐怖と動揺とを見せたということ。何人かの研究者がすでに指摘しているように、辛亥革命の爆発以降、趙且那の阿Qに対する態度が変化したことは、すなわちこのことの明らかな一例である。もし革命が十分な力量を持っていたならば、この世界をひっくり返すことができたのである。確かに、革命の高潮期における、旧制度を根本から覆えすことの可能性の兆しは、魯迅によって、天才的にかつ深刻に表現されている。

しかし、辛亥革命の根本的致命的弱点もそこにあった。既に騒ぎ始めた農民に対して、既に燃えあがった農民の自発的革命への熱情に対して、激励と鼓舞とを与えなかったばかりでなく、反対に、当時農村で支配的地位にあった反動分子と投機分子とによって、排斥が加えられたのである。この革命は、ブルジョア階級と封建勢力との、妥協を結果したのである。

以下のような諷刺の手法を用いて表現された簡単な場面において、魯迅は、辛亥革命後樹立された政

権が、封建階級の利益をひき続き保護し、封建階級と気脈を通じ合っているばかりでなく、封建階級の代表人物が、それに直接に参加までしていることを書いている。この簡単な諷刺の場面は、趙且那の家が強盗に遭った後に出てくる。

ところが拳人且那は、この晩睡れなかった。かれは隊長にむかつ腹を立てていたから。まず贓品の追及が何より大事だという拳人且那の主張に対して、隊長は見せしめのほうが大事だと主張した。ちかごろ隊長はあまり拳人且那を重んじない。かれは机をたたいて反対した。《一人を罰するは百人のいましめですぞ。いいですか、私が革命党になって二十日そこそこ、その間強盗事件がすでに十件以上、その全部が迷宮入りでは、まるで私の顔が立たんじやないですか。せっかく犯人をあげたのに、そんなのんきな話をされたんじやね。いけません！これは私の権限です！》拳人且那はぐっと詰まったが、自説は曲げずに、もし贓品の追及をやらぬなら、自分は民政担当の職を即刻やめるといきました。ところが隊長が《ご随意に》とつっぱねたので、拳人且那はその晩、一睡もできなかったのだ。しかし、さいわい翌日も辞職はしなかった。

そして、革命に対してかつて熱烈な希望と幻想を抱いていた阿Qは、反対についてその犠牲になってしまった。阿Qの悲劇は即ち、辛亥革命の悲劇を反映しているのである。

——陣涌『魯迅小説の現実主義を論ず』、原載『人民文学』1954年11月号、『文学評論集二集』より採録、作家出版社 1956年版。

10. 作者はまた、作品の最後の三章——「革命」「禁じられた革命」「大団円」——の描写でもって、辛亥革命を映している。もっともそれは、辛亥革命の進行に対しての、非常に尖鋭な批判である。阿Qは、抑圧されている農民大衆の中で、強烈な革命要求をもって辛亥革命を迎えた一人である。彼の革命観念がどんなにあいまいででたらめであったとしても、しかし彼の革命性はちょうど発展中であり、彼は、民主革命を動かす基本的な力の一部分に属している。ところが阿Qは、かえって当時の革命政府のために故意に盗賊の冤罪を被せられ、銃殺されてしまった。このことは、辛亥革命の実現したものが、その客観的歴史任務からみてどんなに遠いものであったかということを説明している。辛亥革命の客観的歴史任務は、農民革命を実質とする民主革命たらざるを得

ないので、広範な農民大衆を革命に参加するように導き、彼らを封建の搾取から解放することによってのみ、その任務を十分に完成させることができる。しかし、当時のこの革命を指導したブルジョア階級は、この任務を認識せず、農民階級の革命斗争の指導をしなかった。

作者の辛亥革命に対する批判は、言うまでもなく、この革命を指導したブルジョア階級に対する批判である。作者は“にせ毛唐”や隊長（把総）に類する人物を描いた。“にせ毛唐”は、当時の革命党の中の1人だし、当時の新しい知識分子と称する1人もあった。彼は当時、革命指導に参加しており、つまりは当時のブルジョア階級の利益を代表する人物の一種であった。ところが實質上、彼は依然として地主階級に属する1人の紳士であり、主として相変わらず地主階級の利益を代表していた。隊長（把総）がもともと満清皇朝の老把総のことであるということ、これまた言うまでもないことである。革命政権は既に、把総、白拳人、“にせ毛唐”等の人々の手に操られるところとなっており、従ってそのような革命では、白拳人や趙且那等の人達の頭を革命することができず、却って阿Qを陥れてしまったのは、これまた当然のことである。これはひとつの県の様子である。しかしひとつの県のありのままを描くことは、かえって時代全体の典型意義を具えており、それを通して当時のブルジョア階級と封建地主階級との関係、及び、辛亥革命が封建勢力に対して妥協した根本原因を、作者は見ることができたのである。このように、作者は阿Qと辛亥革命との関係とを描写し、辛亥革命に対して批判する中で、辛亥革命が残したところの問題と教訓とを描いたのである。辛亥革命の時代においては、人民大衆——主として農民大衆——は、一般にまだ非常に遅れていた。しかし一方、広範な農民大衆は依然として革命要求と革命性を持っていた。そしてその後進性と革命性、それは両者ともに辛亥革命とかかわりを持っており、かつそれらが、辛亥革命というものを決定づけたのである。当時広範な農民大衆は未だ遅れた状態にあり、このことが、辛亥革命の徹底し得なかった根本的客観原因のひとつである。しかも当時の革命指導者——ブルジョア階級——は、その広範な農民大衆を、啓蒙も、組織も、指導もしなかった。そのうえ、農民大衆の革命性と革命要求とを認めないばかりでなく、その反対をまですしたのである。このことは、ブルジョア階級の本来的思想特徴によるものであり、つまりは、ブルジョア階級が事実上、徹底した民主革命を指導しない——できない——ということであり、辛亥革命についていえば、その徹底を

不可能ならしめたところの、客観的歴史原因である。この作品は、阿Q——抑圧されている広範な農民大衆を代表する一人——と辛亥革命との関係を通して、十分深刻に十分真実に、この両者のつながりと宿命とを描き、従って、反帝国主義反封建主義の民主革命が、広範な農民大衆の参加なしには完成不可能なこと、及び、中国のブルジョア階級は、農民を指導することはできないし、民主革命を完成させる能力も持っていない、ということを実証したのである。

——馮雪峰『阿Q正伝』
『文芸学習』1955年5号。

11. 辛亥革命は、2千年余の長きにわたって続いてきた封建帝制を覆えし、“中華民国”をうちたてた。これはその歴史的功績である。しかし、この革命を指導したブルジョア階級は、その政治上の軟弱性と革命に敵対する人々との妥協性によって、大衆、とりわけ労働大衆を広範に活動させることを、願いもしなかったし、そうさせるという勇気もなかった。反対に、立憲派、旧官僚、封建軍閥、土豪劣紳、投機分子達を、革命の隊伍に混入させ、指導権を奪奪し、反革命の活動をおし推めさせたのである。その結果、袁世凱が皇帝を称し、張勳が復辟することになった。広大な農村は依然として封建勢力の統治下にあり、広範な貧しい農民の運命は、いまだに地主階級の手握られていたのである。毛主席は述べている。「国民革命には、農村における大きな変化が必要である。辛亥革命にはそのような変化が無かった。それで失敗した。」（『湖南農民運動考察報告』）又、「辛亥革命は何故成功しなかったのか、どうしてメシを食う（飢餓）問題が解決されなかったのか？これは、辛亥革命がただ一清朝政府を打倒しただけであり、帝国主義と封建主義の抑圧、搾取を覆えせなかったことに因る。」（『唯心歴史観の破産』）、「清朝打倒以後、孫中山は失敗した。彼が人民の要求を満足させることをしなかったからである。たとえば、人民の土地に対する要求、反帝国主義の要求を満足させなかった。彼等は反革命を鎮圧することを知らなかった。当時の反革命分子は全く自由であった。」（『アメリカ帝国主義はハリコの虎である』）『阿Q正伝』この革命現実主義の傑作は、辛亥革命失敗の原因が、ブルジョア階級民主革命の不徹底性によるということ、切実に描き出している。あの革命隊伍に混入していた投機分子が、農民革命を許さず、反対に、封建勢力と結んで“御一新”をおこなったのである。彼等は、中国民主革命の主力軍である農民を放棄し、一方反動的な地主階級と手

を結んだのである。『阿Q正伝』は、辛亥革命失敗の経験教訓についての、形象的統括であり、その中の、辛亥革命についての分析は、毛主席の分析、論断と完全に一致している。

辛亥革命の指導者は、かつて“平均地権”というスローガンを出した。本来これは、労働大衆、特に広範な貧しい農民に支持されるはずであった。しかしこれは一枚の空手形に過ぎなかった。革命の進行中彼等は、農民の土地要求を満足させなかったばかりでなく、甚しきに至っては、農民を無視し、労働大衆の利益をまるで顧みなかったのである。『阿Q正伝』はこれについて、極めて真実に、生き生きと描いている。……辛亥革命を指導したブルジョア階級は反対に、広大な農村に大きな変化を生ぜしめず、広範な貧しい農民の、悲惨な運命を変えるために必要な努力をしなかった。これでは、この革命は流産せざるを得ず、失敗に終わった。『阿Q正伝』は、阿Qの芸術形象を通して、このひとつの歴史的真実を、深刻無比に映し出したのである。これがひとつの面である。

別のもうひとつの面は、辛亥革命の波が未庄に及んだとき、革命を偽装するにせ毛唐が、意外にも未庄の“革命人物”第一号になったことである。一瞬驚き恐れた趙秀才は、すばやく、もともと“仲のよくなかった”にせ毛唐とひそかに手を結んでしまった。……この中での活動的分子は、終始にせ毛唐と趙秀才とだけである。彼等は未庄全体を制圧してしまった。偽革命の投機分子と、革命の隊伍にもぐり込んだ地主達は、ぐるになって悪事を働き、指導権を篡奪し、ついに封建勢力の復辟に導いたのである。……中国民主革命は反帝国主義反封建主義のためのものであり、封建階級と“外国に内通する者”とは全て打倒されるべきものである。結果は、“外国に内通する者”はかえって革命党の要人になり、地方郷紳は捲き返してきた。これまた辛亥革命に対する絶妙な諷刺である。

毛主席は言う、「宗法封建制の土豪劣紳、不法地主階級は、何千年もの専制政治の基盤であり、帝国主義、軍閥、腐敗官吏の土台である。」彼等は、「もともと強者に力を借りて覇を称え、農民を踏みつけにしている。」「この封建勢力を打倒すること、これが国民革命の真の目標である。」(『湖南農民運動考察報告』)辛亥革命はこの「目標」をめざして、壊滅的な打撃を与えることをしなかった。革命の隊伍を純粋に保つこと；反革命を鎮圧することをしないで、反対に、彼等とぐるになって、欲しいままに政権を執らせ続けた。そういうわけで、この革命の流産と失敗は、避けられないものであった。『阿Q正伝』

は、このひとつの歴史的真実についても、深刻無比に映し出したのであった。

魯迅は『阿Q正伝』の中で、阿Qというこの不朽の、典型的人物像を造り出した。阿Qの悲劇的生涯には、全面的かつ正確に、辛亥革命失敗の歴史教訓が現れている。『阿Q正伝』が辛亥革命を映し出す一枚の鏡であると、我々が言う所以である。この作品は、革命が誰によって指導されるかということが、革命の成否にとっての重要なポイントであるということを、読者に教えている。作品に描かれた辛亥革命失敗の根本原因は、中国ブルジョア階級が、中国人民の反帝国主義反封建主義の任務を完成に導くことはできないということ、雄弁に説明しており、中国革命はカテゴリーを変える必要があるし、方法を変えることが絶対に必須である。この任務はつまり、プロレタリア階級の前衛である共産党の肩の上にかかって来ざるを得ない。従って、中国革命が必然的に、プロレタリア階級の指導による、新民主主義へと転化して行く、歴史の趨勢を示している。

——陳則光『「阿Q正伝」二題』、『魯迅作品教学初探』(山東師院聊城分院中文系編)

天津人民出版社 1979年4月版。

最後に、外国文学を読み味わうことの困難点について、蛇足的な一言。この小説の題名である『阿Q正伝』について。「阿」は呼びかけ語の前につける親しさを表す接頭語であり、ごく一般的な日常語であるので、中国語を少しでも知っている者には見慣れた語である。そうでなくても中国語の辞書をひけば最初に出てくるし、説明も可能である。「阿姨(おばさん)」「阿麗(麗さん)」というように用いる。ところがその「阿」に、外国の文字である「Q」が付いている。「Qさん」というわけだ。その異和感は、言葉で説明できても、中国の人がこの「阿Q」を見て感ずる一瞬の驚き、そして思わず笑い出してしまうおかしさは、我々にはどうにもしようのない部分である。

さらにその後「正伝」が続く。「阿Q」という奇妙な名前と、厳しい「正伝」という語の結びつき。さらにさらに、本文を読んで行くと、作者はこの語を、通俗小説の中で、用いられる常套句「閑話休題、言帰正伝」から採ったとしている。幾重ものひねりと擬りに擬った仕掛け、参りましたというほかにない。いくら言葉を使っても説明しきれそうにないし、そうすればするほど面白みは逃げて行ってしまう。

(翻訳にあたって、名古屋大学文学部大学院日本文学研究科在籍の中国人留学生歐陽憶耘氏の全面的援助をいただきました。多謝、多謝!!)